

$r=0.827$ ,  $\overline{PAP}<30$  mmHg ( $n=22$ ) で  $r=0.249$  であった。(iii)  $\overline{PAP}$  と RVEF の相関は  $r=-0.727$ ,  $n=30$  であった。〔考察〕心筋シンチグラフィにおいて右室の描出は相対的な指標である。つまり、左室、肺などの摂取に左右される。このため  $\overline{PAP}\geq 30$  mmHg では、 $\overline{PAP}$  と RVUR の相関は高かったが、 $\overline{PAP}<30$  mmHg では、右室の負荷を示していなかった。この点、心プール・シンチグラフィにおける右室駆出率は、 $\overline{PAP}$  と RVUR の相関は高く、右室負荷の早期指標として使用する。

## 22. 運動負荷心筋スキャンによる虚血部位、重症度の評価——additional parameter の併用による——

西村 恒彦 植原 敏勇 林田 孝平  
小塚 隆弘 (国立循環器病セ・放診)  
住吉 徹哉 斉藤 宗靖 (同・内)

過去 3 年間に施行した負荷心筋スキャン連続 1,500 例中、労作性狭心症 (梗塞非合併例) にて冠動脈造影を施行している SVD 52 例, DVD 37 例, TVD 37 例にて虚血の重症度評価を行った。全体として、ECG, TI スキャンの検出率は、77%, 86% であった。冠動脈枝別では LAD 71%, RCA 62%, LCX 50%, 狭窄度別では、75% 狭窄 23%, 90% 狭窄 73%, 99% 狭窄 82%, 100% 狭窄 75% であった。また、slow washout の併用にて、TVD 37 例中 25 例 (68%) にて検出できた。さらに、肺野のタリウム活性は SVD で、冠狭窄度および多枝病変に一致して、上昇した。また、多枝病変でも、冠狭窄度が増加するほど上昇した。以上の成績は、視覚的な一過性欠損像の検出に加え、slow washout および肺野タリウム活性の併用により、SVD, DVD, TVD の鑑別が可能であり、またその重症度も評価できることが示された。

## 23. 陳旧性心筋梗塞症の局所壁運動異常——ISMN による検討——

木村 稔 岩坂 壽二 森 晃基  
小糸 仁史 斧山 英毅 稲田 満夫  
(関西医大・二内)  
夏住 茂夫 松本 掲典 白石 友邦  
(同・放)

陳旧性心筋梗塞症 (OMI) における局所壁運動につき、新たに開発された亜硝酸剤 ISMN (isosorbite-5-mononitrate: TY-10368) を用い比較検討した。

OMI 12 例に ISMN 30 mg 服用前、および 30 分後に  $^{99m}\text{TeO}_4^-$  による first pass 法を multicrystal gamma camera, system 77 を用い、前方向より安静臥位にて施行した。

ISMN により、収縮期血圧は  $134\pm 16$  mmHg より  $114\pm 12$  mmHg と有意に低下するも、拡張期血圧、心拍数は有意の変化を認めなかった。左室駆出分画 (LVEF) は  $36\pm 13\%$  より  $41\pm 17\%$  と増加、左室拡張末期容量 (LVEDV) では全例減少を認め  $140\pm 65$  ml より  $118\pm 68$  ml と変化した。心拍出量は 2 例にて増加を認めた。次に局所壁運動をより詳細に検討するために、左室局所駆出分画 (LVREF) 図より visual に梗塞部 (I)、非梗塞部 (N) を設定し、対応する各クリスタルの REF の平均値より I-REF, N-REF を求めた。I-REF は  $25\pm 10\%$  より  $31\pm 11\%$  と有意に増加するも、N-REF は  $46\pm 16\%$  より  $48\pm 18\%$  と有意の増加はなかった。I-REF の改善は、I の設定にその周囲の虚血巣をも含んでいるために ISMN により著明に改善したと思われる。次に LVEDV 110 ml 以上を A 群、110 ml 未満を B 群とすると、A 群では I-REF, N-REF とともに改善するも、B 群では I-REF のみに改善を認めた。このことは、A 群では非梗塞部といえども心室拡大による LVEDV の増大が正常心筋にも負荷を課しているために、ISMN による EDV 減少が心ポンプ機能改善をもたらしたと思われる。

OMI において ISMN による局所壁運動の変化につき、局所駆出率による検討は、心ポンプ機能を詳細に検討する上で、有用であると思われる。